〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第40号　P.49～56　2007〕

わらべ唄が初期の親子関係形成に及ぼす影響について

永　田　陽　子

Effect of Mother Goose Rhymes to the Development of Early Relationship Between Parent and Infant

Yoko NAGATA

1．はじめに

平均初婚年齢が高まり（厚生労働省平成17年人口動態統計）、子どもを持たない夫婦が増加している。また、親になっても、子育てに楽しさを見出しにくい社会状況となっている。その理由には、地域社会の希薄化や核家族化などの社会的要因によって、育児不安や近隣に子育て仲間がいないなどがあげられている。国は少子化対策を1994年以降実施し10年余になる。それは女性の労働を保障するための預かり保育の充実、在宅で子育てをする家庭への援助として子育て広場事業、一時預かりや父親の育児を促す対策（次世代育成法2004年）へと変遷してきた。その中には、まずは大企業が父親の育児休業取得を実行しやすいようにするなどを含めている。しかし、政府の目指す出生率は下がる一方である。

筆者の担当する子育て中の親の相談からは、子育ての楽しさを見出せない主な理由に次の2点があげられる。ひとつは、夫婦のパートナーシップが構築できないこと、二つ目は、育児の伝達がされていないことである。

核家族では父親の家事・育児の分担が欠かせない。しかし、父親自身が育つときには両親は父と母の役割分業が明確であった家庭が多い時代である。父親が積極的に育児をする価値観を持たないまま、妻から親役割を求められる。現実は、父親は母親以上に育児を学習する機会は少なく、妻の期待にどのように応えてよいかわからない状態である。他方、母親は日々の育児に不安を抱え困り夫に頼るが受け答えがうまくいかず、夫への落胆や不満を抱える。育児相談では子どもに関する主訴を持って来談するが、そのベースに夫婦間のパートナーシップが取れない苛立ちがあるものが多い。経済を支える役割以外の夫は認めず、結婚生活が10年に満たないにもかかわらずすでに離婚を考えたり冷め切った夫婦関係になっている事例も少なくない。

もうひとつは、親子関係の形成がうまくいかないことである。これは、核家族化などにより基本的な育児が伝達されない社会になったことが大きな原因のひとつと考える。子ども特に乳児の健康の判断の仕方、もの言わぬ乳児との遊び（あやし方）やオムツを替えるときの声かけなどである。それらは、以前大家族や地域のいたるところにモデルが存在した。現代は日常の生活の中で学ぶ機会が消失しているのである。そのような社会事情の中で、発達初期の親子関係が形成されないために、育児に楽しさを見出せず義務感ばかりが親の重圧となっている。乳児の体は育てても、心を育てることには無頓着となっている。

最近の乳幼児を連れて利用できるひろばが親の孤立を防ぐなど、子育て家庭支援に果たす役割は大きい。それでも親の育児不安は軽減せず、上述したように、その対策として父親の育児を子育て家庭支援施策にしてきている。家族と共に過ごす時間のとれる働き方の見直しは必要である。また、親の孤立予防だけでなく育児の方法が伝えられない社会システムになったことを取り上げる必要性があると考えて

いる。育児の方法を親が学べることが育児不安の予防になり、ひいては虐待の予防になるであろう。

2．わらべ唄と発達心理との関連について

全国に伝わるわが国の伝統的育児文化は、子守唄、わらべ唄などに代表される。わらべ唄は子どもが集団で遊ぶものだけではなく、乳児に対して使われるわらべ唄もある。それは、一般的には『あやし唄』の呼び名で知られているものである（本稿では、乳児期に用いるわらべ唄を一般的に知られている『あやし唄』の言葉を使用する）。20世紀半ばまでは家庭や地域で人々は、乳児を子守唄やあやし唄を用いて育て、また成長するとわらべ唄で子ども同士は遊び育ってきた。使われている言葉から約千年前までたどれるものもあり（伊丹政太郎：1992年）、わが国の伝統的育児文化が長年にわたり変わらず子どもの育ちに大きな役割を果たしてきたことがわかる。遠野に伝承されているわらべ唄（阿部ヤエ1998，2000，2003年）は、育児の具体的内容の全容をしめしている。そのわらべ唄をE. H. エリクソンの人格発達の課題と照合すると、表１のようになる（永田陽子2006年）。わらべ唄での遊びを通して、乳児期から幼児期にかけて人格の土台である基本的信頼感、自律感や主導性を育て、学童期では積極性が育つと考えられる。

遠野に伝わるわらべ唄と全国各地で使われている唄は多くの共通点がある。それは、昔、山伏が行脚しながら全国に伝達したもの（伊丹政太郎1992年，阿部ヤエ1998年）で、その大元は同じであったと考えられる。したがって、今日のような情報手段が開発されていなかった時代にも、山伏が伝達者となり民衆が継承し全国に共通あるいは類似した育児文化が残された。そして、地方色を加え、時代と共に少しずつ変化したものが各地に現存していると推測される。

現代のようにゲームなどの遊具がなかった時代には、その土地に伝わるわらべ唄で子どもは遊んだ。それが伝承の役割も果たしてきたのである。また、乳児期にはあやし唄で誰もが一度は遊んだ経験を持つ。かつ、乳児とかかわるときに、「にぎにぎにぎ」や「いない、いない、ばあ」を誰もが用いるほど、あやし唄は全国に流布しているのである。これらは、家庭や地域で主に大人を通して、継承されたものである。今日、核家族化、地域社会の希薄化によって、これらのあやし唄も継承されるシステムも失われつつある。

前述したように、“親が親になっていく”には、育児の基本の習得が不可欠であり、そのひとつの方法が、伝統的育児文化にあると考えられる。20世紀半ば頃まであまりに当たり前にこの育児文化が生活の中にあったために、伝統的なわらべ唄と育児や子育て家庭支援との関連に今まで注目してこなかった。しかし、筆者は、わらべ唄が人格の基礎となる発達を容易に促す道具となり得ると考えている。特に乳児期のあやし唄は基本的信頼の形成がしやすく、親が乳児とかかわる方法として注目に値する。親業の習得の結果として親が親になりやすく、また、親子関係が容易に形成されると筆者は考えている。

3．目的

親が子育てを始めた初期にわらべ唄を学び子どもとのかかわりに用いたとき、その影響を明らかにす

表１　遠野に伝わるわらべ唄と人格発達課題

	遠野に伝わるわらべ唄	心理的発達課題(エリクソン)
乳児期前期	安心感を持ち人を好きになる、人の動作を見て模倣する、動作言語の獲得	基本的信頼感 VS 疑惑 信頼
乳児期後期 幼児期前期	意志を動作言語で表す、音声言語の獲得 四肢を的確に動かす、やり取りをする	自律感 VS 恥・疑惑 意思力
幼児期後期	勝ち負けを経験する、単純な協応動作 1対1での遊び、子ども同士の遊び	主導性 VS 罪責感 目的意識
学　童　期	目的を達成する努力、複雑な協応動作 1対１での遊び、集団での遊び	勤勉性 VS 劣等感 適格意識

（永田陽子「人育ち唄」を修正）

ることが目的である。①わらべ唄を学んだ母親自身の変化　②子どもの変化　③母子関係への影響　④母子以外の父親などへの影響を検討し、わらべ唄を育児に導入する意味を考察する。

4．対象と内容

毎月１回40分のわらべ唄の講習会を、同一対象に継続して６ヶ月間実施した。場所は都下の子ども家庭支援センターにある学習室で、毎回同じ場所で行った。

１）対象

対象は、８組の親子である。講習開始時、生後２ヶ月～５ヶ月の乳児８名（表２）とその母親である。出生順位は第１子７名、第２子１名で第１子がほとんどである。本稿では、全調査結果が回収できた７名に関して報告する。

２）内容

講習会は2005年10月～2006年３月の半年間、毎月１回、合計６回である。乳児の発達に合わせたわらべ唄・あやし唄を個別的に実施。１回の講習は40分で、平均一組に数分である。しかし、月齢が近いので他児がやっているのをみて母親はその方法も学ぶことができる。学習したあやし唄を随時家庭で実行してもらう。その回数などは親に任せた。したがって、その頻度は個人差がある。用いた主なあやし唄は表３に示す。唄をする時には、乳児と視線を合せ乳児の様子をみながら行い、コミュニケーションをとる。また、乳児が自ら発声したり、四肢を動かすのを見守る方法である。乳児の反応を待つことにより、子育てに不可欠な親の忍耐力をつける。

表２　講習開始時月齢

月齢	人数
２ヶ月	4
３ヶ月	1
５ヶ月	3

表３　講習で用いた主なあやし唄

・声かけ（うんこー）
・手の動きをみせる
（「てんこてんこ」、「にぎにぎ」など）
・運動をはげます
（「ごろん」、「つんく」、「まてまて」など）

5．調査方法

調査はアンケートと参加時の行動観察とを行った。アンケート調査は調査Ⅰ～Ⅳ(資料参照)である。調査Ⅰ～Ⅲは全セッションの開始前と終了後との２回実施した。調査Ⅳについては、全セッション終了後のみに行った。

調査Ⅰは赤ちゃんイメージ(10項目)で、乳児に対して肯定的－否定的イメージの変化を調査するものである。調査Ⅱは母親自身の自己イメージ（９項目）で自己受容の程度をみるものである。調査Ⅲは母親の子どもや育児に対する肯定感（７項目）に関する調査である。調査表Ⅰ～Ⅲはチェックシートである。それらは、自尊感情尺度、自己受容測定尺度、母性意識尺度、などを参考（堀洋道　2001年）に作成したものである。

講習時には、母親の言動や母子の行動観察を随時行い、今回の報告の補助として用いた。

表４　親の自己イメージの変化(調査表Ⅱ)

	講習会前後の変化の程度					平均得点	
	＋2	＋1	0	－1	－2	1回目	2回目
①忍耐力	0	4	1	2	0	3,57	4,14
②情緒的安定度	1	3	2	1	0	3,14	3,71
③明るさ	0	3	4	0	0	4,00	4,43
④自分自身が好き	1	1	4	1	0	4,00	4,28
⑤疲れを感じる	2	0	5	0	0	2,71	3,29
⑥生活が楽しい	0	5	2	0	0	4,14	4,86
⑦夫婦で話し合う	1	2	4	0	0	3,71	4,86
⑧女としての自分	2	2	2	1	0	3,00	3,71
⑨落ち込む	0	4	2	0	1	2,86	3,14

6．結果と考察

1）親の自己イメージ

表4は調査表IIで実施した親の自己イメージの6ヶ月間の講習会前と後の変化の程度および平均得点を表す。各項目について、例えば⑨落ち込む自分に対して1回目［気になる（2点）］が、2回目［まあそれでよい（4点）］になった時には＋2とし、これを個人内変化とした。プラスの変化が大きいほど、自己肯定感が高まったと考えられる。

調査Ⅰ～Ⅲの中で最も変化のみられたのが、調査IIによる母親の自己肯定感である。①～⑨の項目の平均得点（表4）が示すように、母親自身の自己肯定感が全項目で高くなっているのがわかる。

各項目で見ると、自分の②情緒的安定感は非常に肯定感が高まった（＋2）1人とやや高まった（＋1）3人とを合わせると半数以上が肯定的になっている。同様に、①忍耐力や③明るさの項目でも肯定する傾向がみられる。⑦を除いた自分自身に関する項目の中で⑧女性としての自分の平均得点が最も変化が大きい。⑨落ち込みの項目では、落ち込むことはあってもそのまま自分でよいと思えるようになった（＋1）母親が4人おり、半数以上の母親が肯定的な自己像に変化している。⑥“生活の楽しさ”は7名中5名の母親で高まっている。他の2名は講座開始前から楽しさを感じている母親である。⑦夫婦の話し合いが増えたり（3名）話し合いを続けている（4名）。

子どもの生後1年以内に、母親が子どもとのつながりを感じられると、女性としての自分を受容しやすくなると考えられる。それをバックアップするのが夫婦でのコミュニケーションの高さだろう。あやし唄を子育てに用いると唄のやり方や唄への子どもの反応などが夫婦の話題となりやすく、夫婦間のコミュニケーションが容易になると考える。

2）赤ちゃんイメージ

調査Ⅰで実施した赤ちゃんイメージの結果は表5に示す。④いじらしい、⑤やかましい、⑧こわい、⑨ほほえましい、⑩わずらわしいの項目では変化がみられなかった。①あたたかい、⑥明るいという肯定的イメージが高まっている。また、③じれったさや⑦面倒くささは低まり、子どもと対することに否定的でなくなったことがわかる。

3）子どもへの愛着

全講座終了後に行った調査Ⅳ（表6）では、母親の子どもへの愛着が明確に強まる結果となった。子どもに対して①いとおしいと感じ②あやす時間や機会が増え子どもの③気持ちがわかりやすく④つながりを強く感じるようになっている。また、母親の子育てへの迷いは一人を除き他の6名では減少、全員が⑥子育てが楽しくなったと回答している。そして、子どもには人とつながる能力があると思えるようになっている。あやし唄を用いて遊ぶと子どもの成長の手ごたえを感じられ、親が“楽しめる”ことが子どもをより成長させていくと考えられる。

表5　赤ちゃんイメージの変化（調査表Ⅰ）

項　目	平均得点	
	1回目	2回目
①あたたかい	2,57	3,00
②よわよわしい	0,86	0,57
③じれったい	0,43	0,29
④いじらしい	1,43	1,43
⑤やかましい	0,43	0,43
⑥あかるい	2,43	2,86
⑦めんどうくさい	0,71	0,29
⑧こわい	0,14	0,14
⑨ほほえましい	3,00	3,00
⑩わずらわしい	0,29	0.29

表6　親の子育て意識の変化（調査表Ⅳ）

	非常に増えた	増えた	変化なし	減少した	非常に減少した
①いとおしさ	5	2	0	0	0
②あやす時間等	4	3	0	0	0
③子とのつながりの強さ	3	4	0	0	0
④子育ての迷い	0	1	0	6	0
⑤子育てが楽しい	5	2	0	0	0
⑥子の人とつながる能力	6	1	0	0	0
⑦子の気持ちがわかり易くなる	1	6	0	0	0

表７―①　母親自身の変化

・子育てが楽しくなった（２名）
・子どもとのコミュニケーションが増えた（２名）
・子どもとのかかわりが上手になった（２名）
・家でも時々やって、いっしょにできて嬉しかった
・歌を歌うことが多くなった、身振り手振りも多くなった
・子どもの気持ちになって、やさしくなれた
・自ら遊ぼうと誘ってくるので、普段遊んでいてよかったととても実感している
・目を見て話すことが大事だと改めて確認できた
・０歳児だけれどちゃんと見てるし、感じていると思った（２名）
・上の子の時には授乳時 TV を見ていたことを悪かったと思う

表７―②　子どもの変化

・子どもの安定性がよくなった
・人が好き、人に慣れた
・表情が豊かになった
・意思をしっかり持つようになった
・子どもがしっかりと目を見て聞いている（３名）
・子どもも遊びの楽しさがわかってきたように思う
・子どもと目が合うようになりよかった
・数ヶ月でやっと先生と目が合うようになった

表７―③　父親などの変化

・主人は子どもと触れ合いが増えて生活面で楽しくなった
・父親が子どもとの接し方がわからなかったが、あやし唄と遊びを知って遊べるようになった
・いっしょにあやし唄をやって遊んでいた
・上の子と母親との関係が変化した

調査Ⅳの質問５の自由記述からは多大な変化が読み取れる（表７―①②③）。子どもの成長だけでなく母親自身の変化、そして、講座に参加していない父親やきょうだいとの関係の変化も見られている。

育児の最初の１年は、体重・身長の増加や運動発達など身体の成長に関心が行きがちである。しかし、参加者の母親たちの関心は、目が合うことの大切さや子どもの力の再認識、コミュニケーションスキルが上がり、子どもと遊べる自分になった、育児が楽しくなったなど心的変化（表７―①）が多くをしめている。また、子どもの成長についても同様の傾向（表７―②）がみられる。人が好きになり、人に慣れた、目を見て相手のことを聞いているなど他者との向き合い方が変化している。表情が豊かになり意思をもつようになったなど子ども自身の自我が強まっていると捉えている。上の子との母子関係が変化したり、講座に参加していない父親が遊び方を知り、子どもへの関心が増し育児参加が促されている（表７―③）ことも注目に値する。子どもとのかかわりを通して父親自身の自尊感情も高められていくであろう。子どもとかかわる父親になるには、育児の仕方の学びが不可欠であることも今回の結果から言える。母親や地域の人々と赤ちゃんとのあやし唄を用いたかかわりがきっかけとなり、家庭で母親がやっていることを模倣し父親の育児参加が容易になることを示している。

調査Ⅲに関しては、明確な変化が得られなかった。

子育てに戸惑いがちな乳児期の初期に子どもとのかかわりやすいわらべ唄・あやし唄を親が学び、子どもと共に遊ぶことは親子関係の形成に効果があることが示唆された。また、親の子どもを見る視点も変化し、単に身体的な成長だけでなく、乳児期から子どもの感情や子どもの感じ取る能力に親の関心が向けられることは重要なことである。さらに、その後の親子関係にも影響を及ぼすと考えられる。子どもの成長の視点からみると、愛情を持った親に育てられることで、エリクソンの言う人格の土台である基本的信頼感が形成される。

発生した問題に対応する子育て家庭支援は不可欠であるが、予防的観点に立つ支援に力点を置く必要性を筆者は言ってきた。わらべ唄を用いると、教える世代とそれを受け取る世代の異世代の交流もつくることが可能である。しかも、誰もが嬉しい経験としてわらべ唄で遊んでいる。大げさに言えば、国民のほとんどがわらべ唄で遊んだという経験は、子育ての社会資源と言える。この埋もれた社会資源を子育て家庭支援に活用する可能性が本研究によって認められた。また、子どもが育つ時にわらべ唄のような容易な方法で乳幼児に接した経験は養育性の準備教育にもなろう。ただし、単に遊ぶのではない。子どもが自分の力を発揮し成長しやすい、また親子関係に効果を及ぼす方法を学び直す必要はあると考えている。わらべ唄を通しての子育てに関しての社会資源を使うことを提案したい。

８．今後の課題

本報告では、子育てに楽しさを見出せる結果となった。しかし、調査対象人数は７名と少ないので、今後、同じような研究が重ねてされる必要があるだろう。また、調査表もまだ検討の余地があると考える。調査表Ⅲでは、明らかな変化が把握できなかっ

た。

今回、用いたわらべ唄は乳児期のあやし唄であった、乳児期後半から幼児期に用いるわらべ唄では勝ち負けが入ってくる。勝ち負けを理解し、負けを受け容れることは、自分の欠点を認め等身大の自分を受容する力―自己肯定感を高めること―になると考える。その効果に関しては今後の研究に期待するところである。また、子どもに社会的価値判断を教える唄もあり、それらも親が学び取り入れたときにどのような効果がみられるかは今後の課題のひとつである。

参考図書

阿部ヤエ「とおの」第2号　遠野に伝わるわらべ唄　遠野市立博物館、1996

阿部ヤエ「人を育てる唄」エイデル研究所、1998

阿部ヤエ「呼びかけの唄」エイデル研究所、2000

阿部ヤエ「知恵を育てる唄」エイデル研究所、2003

池本由香「失われる子育ての時間」勁草（けいそう）書房、2003

伊志嶺美津子他編著「サラダボウルの国カナダ」ひとなる書房、1994

伊丹政太郎「遠野のわらべ唄」岩波書店、1992

伊丹政太郎「唄に秘められた里の歴史」語りの世界37　P25～31、2003

永田陽子「人育ち唄」―らくらく子育て・子育て支援―エイデル研究所、2006

丹羽洋子「小児科医者内藤寿七郎物語」赤ちゃんとママ社、2003

堀　洋道監修/松井豊編「心理測定尺度Ⅰ」サイエンス社、2001

堀　洋道監修/松井豊編「心理測定尺度Ⅲ」サイエンス社、2001

マロッホ、S「母・乳児とコミュニケーション的音楽性」Macarthur Auditory Research Centre Sydney University of Western Sydney Macarthur、2006

渡辺久子「母子臨床と世代間伝達」金剛出版、2000

〈謝辞〉

本調査にご協力いただいた子ども感動コミュニティ機構（CoCo）および北区育ち愛ほっと館に謝意を表します。

資料

調査表Ⅰ

＊あなたは“赤ちゃん”を頭に思い浮かべた時に、どのような感じがしますか？下の言葉でみたときに、どの段階にあてはまるでしょうか。気持ちに合うところに○をしてください。

項　目	3非常にその通り	2その通り	1少しその通り	0そんなことはない
①あたたかい				
②よわよわしい				
③じれったい				
④いじらしい				
⑤やかましい				
⑥あかるい				
⑦めんどうくさい				
⑧こわい				
⑨ほほえましい				
⑩わずらわしい				

調査表Ⅱ

＊“今のあなた自身のこと”について現在どのように思っていますか？下に示された例のように、当てはまるところに○を付けてください。あなた自身がどう思っているかで記入してください。

5それで全くよい、そのままでよい　4それでまあまあよい、それでかまわない　3どちらでもよい、わからない　2それでは少し嫌だ、少し気になる　1それでは全く嫌だ、気に入らない

例　それでは少し嫌だ、気になる　という場合　5　4　3　②　1

	5	4	3	2	1
①忍耐力					
②情緒安定度					
③あかるさ					
④自分自身が好き					
⑤疲れを感じる					
⑥生活が楽しい					
⑦夫婦で話し合う					
⑧女としての自分					
⑨落ち込む					

調査表Ⅲ

＊お母さんの気持ちについて伺います。一番近い気持ちに○をしてください。

	はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ
①子どもといることに楽しみを感じる				
②子どもに気持ちはあると思う				
③子どもに振り回されている				
④子どもがかわいい				
⑤子どもにどう接すればよいかわからない				
⑥子どもと一緒に遊ぶ時間を持てる				
⑦子どもといるとイライラを感じる				
⑧子どもを持って良かった				
⑨子どもを育てることが負担である				
⑩子どもの気持ちが読み取れる				
⑪育児について何かにつけ後悔する				
⑫親になったことで人間的に成長できた				
⑬子育ては大変だ				

調査表Ⅳ

「わらべ唄」参加者アンケート

わらべ唄講座に参加していかがでしたでしょうか？

私たちは、わらべ唄講座をよりよいものにしていくために、参加者皆さまの正直なご意見、ご感想を伺わせていただきたいと考えています。ご協力をお願いいたします。

1、わらべ唄講座はいかがでしたか？（あてはまる所に○をしてください）

全然よくなかった	よくなかった	普通	よかった	とてもよかった

2、この講座でよかったことは何ですか？

3、この講座でよくなかったことは何ですか？（工夫が必要なことや改善点など）

4、友人にこの講座をすすめますか？どのように話しますか？

5、参加して変わったことや気づいたこと（子どもの見方や感じ方、考え方など）がありますか？どのよう

なことですか？

ご自身以外の人で変わったことなどがありますか？具体的にご記入ください。

お子様

ご家族

その他

6、ご自分の気持ちにもっとも近いところに○をしてください

①子どもをいとおしいと感じることが増えた

非常に減少した　減少した　変化しなかった　増えた　非常に増えた

②子どもに人とつながる能力があると思えるようになった

全然思えなくなった　思えなくなった　変化なし　なった　とてもなった

③子どもをあやす時間や機会が増えた

とても減少した　減少した　変化なし　増えた　とても増えた

④子育てが楽しくなった

全然ならなかった　ならなった　変化なし　なった　とてもなった

⑤子育てに迷うことが増えた

とても減少した　減少した　変化なし　増えた　とても増えた

⑥子どもの気持ちがわかりやすくなった

とてもわからなくなった　わからなくなった　変化なし　わかるようになった　とてもわかるようになった

⑦子どもとのつながりを強く感じるようになった

とても弱くなった　弱くなった　変化なし　強くなった　とても強くなった